

『朱子語類』卷第一百二十五「老氏」「莊子附」訳注(三)

山田 俊

本稿は、『朱子語類』卷第一百二十五「老氏」「莊子附」訳注(一)×『熊本県立大学文学部紀要』第16巻(通巻69号)所収、2010年。以下「第一稿」と略す)、「同(二)」「熊本県立大学文学部研究科論集』第3号所収、2010年。以下「第二稿」と略す)に続く第三稿である。本訳注の執筆方針、常用する参考文献等については各稿を参照されたい。

【27】

儒教自開闢以來、二帝三王述天理、順人心、治世教民、^(校1)厚典庸禮之道⁽¹⁾。後世聖賢遂著書立言⁽²⁾、以示後世、及世之衰亂、方外之士⁽³⁾厭一世之紛拏、畏一身之禍害、^(校2)魮空寂以求全身於亂世而已。及老子倡^(校3)其端、而列禦寇^(校4)、莊周、楊朱之徒和之。孟子嘗闢之

以爲無父無君⁽⁴⁾、比之禽獸。然其言易入、其教易行⁽⁵⁾。

當漢之初、時君世主皆信其說、而民亦化之。雖以蕭何、曹參、汲黯、太史談輩⁽⁶⁾亦皆主之、以爲眞足以先於

六經⁽⁷⁾、治世者不可以莫之尚也。及後漢以來、米賊張陵、海鳥寇^(校5)謙之⁽⁸⁾之徒、遂爲盜賊⁽⁹⁾。曹操以兵取陽

平、陵之孫魯即納降欵^(校6)⁽¹⁰⁾、可見其虛繆不足稽

矣。「僞」^(校1)

(校1)「厚」、朝鮮整版は「惇」に作る。(校2)「魮」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本は「魮」に作る。(校3)「倡」、朝鮮整版、楠本本、和刻本、正中書局本は「唱」に作る。(校4)「寇」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本、和刻本は「寇」に作る。(校5)「寇」、朝鮮整版、楠本本、和刻本は「寇」に作る。(校6)「欵」、朝鮮整版、楠本本は「款」に作る。

(校1)「厚」、朝鮮整版は「惇」に作る。(校2)「魮」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本は「魮」に作る。(校3)「倡」、朝鮮整版、楠本本、和刻本、正中書局本は「唱」に作る。(校4)「寇」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本、和刻本は「寇」に作る。(校5)「寇」、朝鮮整版、楠本本、和刻本は「寇」に作る。(校6)「欵」、朝鮮整版、楠本本は「款」に作る。

(校1)「厚」、朝鮮整版は「惇」に作る。(校2)「魮」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本は「魮」に作る。(校3)「倡」、朝鮮整版、楠本本、和刻本、正中書局本は「唱」に作る。(校4)「寇」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本、和刻本は「寇」に作る。(校5)「寇」、朝鮮整版、楠本本、和刻本は「寇」に作る。(校6)「欵」、朝鮮整版、楠本本は「款」に作る。

(校1)「厚」、朝鮮整版は「惇」に作る。(校2)「魮」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本は「魮」に作る。(校3)「倡」、朝鮮整版、楠本本、和刻本、正中書局本は「唱」に作る。(校4)「寇」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本、和刻本は「寇」に作る。(校5)「寇」、朝鮮整版、楠本本、和刻本は「寇」に作る。(校6)「欵」、朝鮮整版、楠本本は「款」に作る。

(校1)「厚」、朝鮮整版は「惇」に作る。(校2)「魮」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本は「魮」に作る。(校3)「倡」、朝鮮整版、楠本本、和刻本、正中書局本は「唱」に作る。(校4)「寇」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本、和刻本は「寇」に作る。(校5)「寇」、朝鮮整版、楠本本、和刻本は「寇」に作る。(校6)「欵」、朝鮮整版、楠本本は「款」に作る。

(校1)「厚」、朝鮮整版は「惇」に作る。(校2)「魮」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本は「魮」に作る。(校3)「倡」、朝鮮整版、楠本本、和刻本、正中書局本は「唱」に作る。(校4)「寇」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本、和刻本は「寇」に作る。(校5)「寇」、朝鮮整版、楠本本、和刻本は「寇」に作る。(校6)「欵」、朝鮮整版、楠本本は「款」に作る。

(校1)「厚」、朝鮮整版は「惇」に作る。(校2)「魮」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本は「魮」に作る。(校3)「倡」、朝鮮整版、楠本本、和刻本、正中書局本は「唱」に作る。(校4)「寇」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本、和刻本は「寇」に作る。(校5)「寇」、朝鮮整版、楠本本、和刻本は「寇」に作る。(校6)「欵」、朝鮮整版、楠本本は「款」に作る。

(校1)「厚」、朝鮮整版は「惇」に作る。(校2)「魮」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本は「魮」に作る。(校3)「倡」、朝鮮整版、楠本本、和刻本、正中書局本は「唱」に作る。(校4)「寇」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本、和刻本は「寇」に作る。(校5)「寇」、朝鮮整版、楠本本、和刻本は「寇」に作る。(校6)「欵」、朝鮮整版、楠本本は「款」に作る。

※本條は酒井忠夫「朱子と道教」（『朱子学大系第一巻 朱子学入門』所収。明德出版社、1974年）に概訳が見られる（p.413）。

〔訳〕

儒教とは、その開闢以来、（堯・舜の）二帝、（禹・湯・文王）の三王が天理を述べ、人心に順い、世を治め民を教え、聖典を充実させ、礼を恒常的なものにした道なのである。時代が下って、聖人・賢者が言説に書き表し、後世に示したのだ。世が衰乱するに及んで、方外の士は世が争乱するのを嫌い、その身に禍害が及ぶのを畏れ、空寂の思想に耽ることで乱世に於いてその身を全うすることを求めた。老子がその端を發すると、列禦寇、莊周、楊朱の徒がこれに付和した。孟子はかつてこの「父なし君なし」の思想を退け、禽獸にも等しいものとした。しかし、彼らの言葉は参入しやすく、その教えは行い易かった。漢初にあつては、当時の君主はみなその説を信じ、人民もまたこれになびいた。蕭何、曹參、汲黯、司馬談でさえも皆この説を重んじ、正に六経よりも優先するに足るとし、世を治める者が尊重しなければならぬものであると考えたのだ。後漢以降になると、米賊張道陵や海島寇謙之の

徒が反逆者となった。曹操は兵を率いて（三張の根拠地の）陽平を占領したので、張陵の孫・張魯は曹操に降伏した。（老莊、楊朱、張道陵、寇謙之等が）全く出鱈目で考慮に値しないことは明らかである。（沈儔）

〔注〕

（一）「二帝三王」厚典庸禮之道」：類似の文が『語類』には「至於二帝三王述天理、順人心、治世教民、厚典庸禮之大法、一切不復有行之者」（『語類』卷一百二十六p.3009）と見られる。「二帝」は「唐堯・虞舜」、「三王」は「夏禹・殷湯王・周文王」と思われる。「述天理、順人心」は『語類』に「蓋事之初、在我亦有所勉強、在人亦有所難堪。久之當事理、順人心、這裏方易」（『語類』卷七十六p.1953）と「當事理、順人心」とも見られる。朝鮮整版の「惇典庸禮」に就いては、朱熹『孟子章句集注』「滕文公章句下」が「孔子懼、作春秋。春秋、天子之事也……」の箇所引く胡安国注が「仲尼作春秋以寓王法。惇典、庸禮、命徳、討罪、其大要皆天子之事也」（p.272）と述べている。元・詹道傳『孟子纂箋』は「厚典」とする胡氏注を引きつつ、「宜改作惇字」とする

(卷六)。

(2) 「立言」：『語類』には多く見られるが、「聖人」の行いとしては、「不須説子夏是大儒小儒、且要求箇自家使處。聖人爲萬世立言、豈專爲子夏設」(『語類』卷三十一p.205)等見られる。

(3) 「方外之士」：「方外」の語は「釋氏所謂敬以直内、只是空豁豁地、更無一物、却不會方外。聖人所謂敬以直内、則湛然虛明、萬里具足、方能義以方外」(『語類』卷一百二十六p.3015)等『語類』には多数見られるものの、「方外之士」の用例は本例のみ。「方外」の語は『莊子』「大宗師」に「孔子曰、彼游方之外者也、而丘游方之内者也」(p.65)と見られる。尚、『二程遺書』に「問、方外之士有人來看、他能先知者、有諸」(『二程集』卷十八、p.194)と有る。

(4) 「無父無君」：『孟子』「滕文公篇下」。第一稿【7】條注(1)参照。

(5) 「其言易入、其教易行」：「吾言甚易知、甚易行。天下莫能知、莫能行」(『老子』七十章)。

(6) 「蕭何」：「曹參」に就いては第一稿【7】條注(4)を参照。又「參爲漢相國、出入三年。

卒、諡懿侯。子窋代侯。百姓歌之曰、蕭何爲法、

顧若畫一。曹參代之、守而勿失。載其清淨、民以寧一。…太史公曰、曹相國參攻城野戰之功所以能多若此者、以與淮陰侯俱。及信已滅、而列侯成功、唯獨參擅其名。參爲漢相國、清靜極言合道。然百姓離秦之酷後、參與休息無爲、故天下俱稱其美矣」(『史記』卷五十四「曹相國世家第二十四」p.2031)と、蕭何と曹參は共に「清淨の政」を行ったとされている。「汲黯」に就いては「黯學黃老之言、治官理民、好清靜、擇丞史而任之」(『史記』卷一百二十「汲黯列傳第六十」p.3105)と有る。太史談に就いては、「太史公學天官於唐都、受易於楊何、習道論於黃子。太史公仕於建元元封之間、愍學者之不達其意而師悖、乃論六家之要指曰、…」(『史記』卷一百三十「太史公自序第七十」p.3288)と有り、「六家要旨」で道家を高く評価している。尚、金谷治『秦漢思想史研究』「第二章 漢初の道家思潮」「第三章 秦漢儒生の活動(上)」(日本學術振興會、昭和35年)等を参照。

(7) 「先於六經」：『漢書』の班固の次の批判に基づ

く。「贊曰、…又其是非頗繆於聖人、論大道則先黃老而後六經、序遊俠則退處士而進姦雄、述貨殖則崇勢利而羞其賤貧、此其所蔽也」（『漢書』卷六十一「司馬遷傳第三十一」p.2757）。

(8) 「張陵・寇謙之」：「張陵」は後漢末の人。蜀の鶴鳴山で仙道を学び、天師道を開いた。信徒に米肉等を献納させたことから、批判的に「米賊」と呼ばれた（『三國志』卷八「魏書」「一公孫陶四張傳第八」p.263）。「寇謙之」は北魏の道士。修道の結果、太上老君の降臨に遭い、道教を清整し新天師道を起したとされる（『魏書』卷一百一十四「釋老志」p.3049）。張陵に就いて朱熹は「某問、道家之説、云出於老子。今世道士又却不然。今之傳、莫是張角術、曰、是張陵、見三國志。他今用印、乃陽平治都功印。張魯起兵之所、又有祭酒、有都講祭酒。魯以女妻馬超、使爲之。其設醮用五斗米、所謂米賊是也」（『語類』卷一百二十六、p.3033）と、当時の道士の立場は老子に基づくものではなく張陵に依るものと述べている。「海島」に就いては、酒井忠夫論文は「五斗米道が晋代に、江南の海浜地域で行われ

て反乱したために海島と称したもの。寇謙之が海島の五斗米道を指導して反乱してはいない」（p.413）としている。この点について、宮川尚志は晋代の宗教反乱を論じて、「単に海島とかまたは海に入ると言えばこの地（＝郁州）を指すことが多かったと思われる」（『中國宗教史研究 第一』同朋舎、1983年。p.219）と指摘している。尚、三張と海浜地区との関わりに就いては、陳寅恪「天師道與濱海地域の關係」（陳寅恪文集 之二『金明館叢稿初編』所収。上海古籍出版社、1980年）を参照。

(9) 「盜賊」…「正道に悖る者」程度の意味であろう。『語類』には、「問、破斧詩傳何以謂被堅執銳皆聖人之徒。曰、不是聖人之徒、便是盜賊之徒」（『語類』卷八十一p.2114）等、「聖人」と「盜賊」を対比する例が見られる。

(10) 「納降款」…「降伏する」の意。『宋史』に「劉繼元表納降款、太宗陳儀衛城北臺以受之」（『宋史』卷四百六十六「宦者一」p.13606）等と有る。曹操の事跡に就いては、『三國志』卷一「武帝紀第一」（p.45）、『同』卷八「一公孫陶四張

傳第八」(p.264)を参照。

(11)「匱」：沈憫。第一稿【4】條注(10)を参照。

老子書

道可道章第一

【28】

問、「老子『道可道』章⁽¹⁾、或欲以『常無』『常有』爲句讀、而『欲』字屬^(校1)下句者、如何。曰、「先儒亦有如此做句者、不妥帖⁽²⁾」。問、「三十輻共一轂、當其無、有車之用⁽³⁾」。無、是車之坐處否。曰、「恐不然。若以坐處爲無、則上文自是就輻轂而言、與下文戶牖埏埴是一例語。某嘗思之、無是轂中空處。惟其中空、故能受軸而運轉不窮。猶傘柄上木管子、衆骨所會者、不知名何。緣管子中空、又可受傘柄、而闢^(校3)闢⁽⁴⁾上下。車之轂亦猶是也。莊子所謂『樞始得其環中、以應無窮』⁽⁵⁾、亦此意。」「匱」

(校1)「屬」、楠本本、和刻本、正中書局本は「屬」に作る。(校2)「帖」、朝鮮整版、楠本本、和刻本、正中書局本は「貼」に作る。(校3)「闢」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本は「開」に作る。

〔訳〕

質問「老子の『道可道』章は、或る者は『常無』、『常有』で句読し、『欲』字を下句に続けようとしています。どうでしょうか。朱子「先儒にも又この様に句点する者がいるが、適切ではない」。質問「三十の輻が、中央の一つの轂に集まり、その何も無い所にこそ、車輪としての働きが有るのだ」に就いて、『無』とは車の座る場所のことでしょうか。朱子「恐らくはそうではない。もし座る場所を『無』としたならば、前半はもともと『輻轂』に就いて述べていて、後半の『戸牖』『埏埴』と一貫した事例であるはずだからだ(これらにも『無』が該当されなければならず、座る場所では説明がつかない)。私は以前これ考えたことが有るが、『無』は轂の中の空処のことであり、空っぽであるから、軸を受けて絶え間なく動くことが出来るのだ。ちようど、傘の柄の上の木管で、多くの骨が集まる所の、何と呼ぶのかは分からないもの様だ。管の中が空っぽであるから、傘の柄を受けることが出来て、開け閉めして上下することが出来るのだ。車の轂もちようどこの様なものだ。莊子が『樞^{とほ}であつてこそ環の中心に於いて窮まりない変転に対応出来る』と言っているのも、又これと同じ意味だ。(沈憫)

〔注〕

(1) 「道可道」：『老子』第一章。第二稿【20】條注(7)を参照。

(2) 「妥帖」：「妥当である、信用出来る」の意。

『語類』には「思而不學則殆。雖用心思量、不曾就事上習熟、畢竟生硬、不會妥帖」(『語類』卷二十四p.585)等と見られる。朝鮮整版等の「妥帖」としては「便見得不妥帖」(『語類』

卷一百一十三p.2749)と有り、何れも否定的形式で用いられている。『近代漢語大詞典』は「妥帖」で「穩妥、可靠」(p.1899)とする。尚、この『老子』の句点を巡る問題については、第二稿

【20】條を参照。

(3) 「三十輻共一轂」：「三十輻共一轂、當其無、有車之用。埏埴以爲器、當其無、有器之用。鑿戶牖以爲室、當其無、有室之用。故有之以爲利、無之以爲用」(『老子』第十一章)。

(4) 「闢闔」：「開き閉じる」の意。転じて造化の働きも意味する。第一稿【5】條注(2)を参照。

(5) 「樞始得其環中」：「彼是莫得其偶、謂之道樞。樞始得其環中、以應無窮。是亦一無窮、非亦

一無窮也。故曰莫若以明」(『莊子』「齊物論」p.14)。

谷神不死章第六

【29】

正淳問「谷神不死、是爲玄牝」⁽¹⁾。曰、「谷虛。谷中有神、受聲所以能響、受物所以生物」。⁽²⁾「營」

※ 楠本本はこの條無し。

〔訳〕

正淳が「谷神は死に絶えることはなく、これを玄牝と呼ぶ」に就いて質問した。朱子『「谷」とは空っぽで、谷中に不思議な働きがあつて、声を受けるから響くことが出来、物を受けるから物を生み出すことが出来るのだ。』(黄營)

〔注〕

(1) 「谷神不死」：「谷神不死、是謂玄牝。玄牝之門、是謂天地根。縣縣若存、用之不勤」(『老子』第六章)。

(2) 「營」：黄營。第一稿【5】條注(9)を参照。

【30】

問「谷神」。曰、「谷只是虚而能受、神謂無所不應。它又云、『虚而不屈、動而愈出』⁽¹⁾。有一物之不受、則虚而屈矣。有一物之不應、是動而不能出矣」。問、「『玄牝』、或云、玄是衆妙之門、牝是萬物之祖⁽²⁾」。曰、「不是恁地說。牝只是木孔承筭、能受底物事。如今門欄謂之牝、鑲則謂牝^(校1)。鑲管便^(校2)是牝、鑲鬚便^(校3)是牝^(校4)。雌雄謂之牝牝、可見。玄者、謂是至妙底牝^(校5)。不是那一樣底牝」。問、「老子之言、似有可取處」。曰、「它做許多言語、如何無可取。如佛氏亦儘有可取、但歸宿門戶⁽⁴⁾都錯了」。「夔孫⁽⁵⁾」

(校1)「謂牝」、朝鮮整版、正中書局本は「謂之牝」に作る。(校2)「便」、朝鮮整版は「便」に作る。(校3)「牝」、和刻本は「牝」に作る。(校4)「牝」、和刻本は「牝」に作る。

※ 楠本本はこの條無し。

〔訳〕

「谷神」についての質問。朱子「『谷』は単に空っぽで物を受け入れることが出来るものということだ。『神』とは無限に応じることだ。『老子』は又『か』らっぽでありながら尽き果てることなく、動けば動く程、ますます出てくる」とも言っている。たった一つ

の物でも受け入れないことが有れば、『からっぽで尽き果てる』ことになってしまう。たった一つの物でも応じないものが有れば、『動いても出てくる』ことが出来ないことになってしまう。質問「『玄牝』は、或る者は『玄とは衆妙の門で、牝は万物の祖である』と言っています。朱子「その様に説くべきではない。『牝』は単に木に穴が開いていて、横木を入れる様なもので、受け入れることが出来るものということだ。現在、門欄を『牝』と謂い、鑲を『牝』と言う様なものだ。鑲管が『牝』であり、鑲鬚が『牝』なのだ。『雌雄』を『牝牝』と言うことから分かるであろう。『玄』は、至妙（が出てくるぞ）の『牝』を言うのであって、あの様な意味での『牝』ではないのだ」。質問「老子の言葉には、取るべき点がある様ですが」。朱子「老子は多くの発言をしている、取るべきものが無いなどということがありえようか。仏教の場合でも取るべき点が多いのだ。ただ到達点も入り口も全部間違っているのだ。」(林夔孫)

〔注〕

(1)「虚而不屈」：「天地之間、其猶橐籥乎。虚而不屈、動而愈出」(『老子』第五章)。

(2) 「或云」：例えば、司馬光『道德經』注には「玄者言其微妙、牝者萬物之母」(司馬光『道德經論』1/3p.10)と見られる。

(3) 「今門禮謂之牡」：『禮記』「所舉於晉國管庫之士七十有餘家」(『禮記』「檀弓」p.513下)の鄭玄注に「管、鍵也」(p.513上)有り、賈公彥疏に「案月令注、管、籥、搏鍵器、鍵謂鎖之入内者、俗謂之鎖須管、謂夾取鍵、今謂之鑰匙、則是管鍵爲別物。而云管鍵者、對則細別、散則大同、爲鍵而有、故云管鍵」(p.516上)と有り、又、「月令」の「坏、城郭、戒門閭、脩鍵閉、慎管籥」(『禮記』「月令」p.856下)の鄭玄注に「鍵牡、閉牝也。管、籥、搏鍵器也」(p.856下)と有り、賈公彥疏に「鍵牡閉牝者、凡鑣器入者謂之牡、受者謂之牝」(p.857上)と見られる。又『漢書』にも「成帝元延元年正月、長安章城門、門牡自亡、函谷關次門牡亦自亡」(『漢書』卷二十七中之上「五行志第七中之上」p.1401)と有り、晋灼注は「西出南頭第一門也。牡是出籥者」(p.1402)と、顔師古注は「牡所以下閉者也。亦以鐵爲之、非出籥也」(p.1402)と述べる。

(4) 「歸宿」：「最終的に辿り着くべき境地、最終的に落ち着くべき地点」の意。『語類』には「惟篤志、又切問近思、便有歸宿處、這心便不汎濫走作、只在這坎窠裏不放了、仁便在其中」(『語類』卷四十九p.1204)等と多く見られる。『近代漢語大詞典』は「結局、最終着落」(p.691)とする。尚、「歸宿」の語は夙に『荀子』「非十二子」に「則偶然無所歸宿」として見られ(新編諸子集成『荀子』「非十二子」、中華書局、1992年。p.93)、「收拾がつかない、統一が無い」の意味で用いられている。「門戸」：「個々の学問の入口」の意。『語類』には「問、孔子教人就事上做工夫、孟子教人就心上做工夫。何故不同。曰、聖賢教人、立箇門戸、各自不同」(『語類』卷十九p.429)等と見られる。

(5) 「夔孫」：林夔孫。第一稿【16】條注(2)を参照。

【31】

問「谷神不死」。曰、「谷之虛也、聲達焉、則響應之、乃神化」之自然也。「是謂玄牝」。玄、妙也。牝、是

有所受而能生物者也。至妙之理、有生之意焉、程子
所^(校1)取老氏之説也⁽²⁾。「人傑」⁽³⁾」

(校1)「所」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本、和刻本は「所以」に作る。

※ 楠本本は【34】條の直前に配されている。

〔訳〕

「谷神は死に絶えることはない」への問い。朱子「谷は空っぽであり、そこに声が達すると響が応じる、これが不可思議な働きである自然というものだ。『これを玄牝と呼ぶ』の『玄』とは、妙ということだ。『牝』とは、物を受け止め、物を生み出すことが出来るということだ。至妙の理には、生生の意が有る。程子は老子の説を採用しているのだ」(万人傑)

〔注〕

(1)「神化」：「不可思議な変化、働き」の意。「語類」には、「或問一故神。曰、一是一箇道理、却有兩端、用處不同。譬如陰陽、陰中有陽、陽中有陰。陽極生陰、陰極生陽、所以神化無窮」(『語類』卷九十八p.2511)等と見られる。

(2)「生生之意」：「老子亦曰、三生萬物、此是生生之謂易、理自然如此」(『二程集』卷十八

p.225)。『語類』には「仁屬春、屬木。且看春間天地發生、藹然和氣、如草木萌芽、初間僅一針許、少間漸漸生長、以至枝葉花實、變化萬狀、便可見他生生之意」(『語類』卷十七p.383)等と見られる。

(3)「人傑」：萬人傑。第二稿【22】條注(4)を参照。

【32】

玄^(校1) 牝蓋言萬物之感而應之不窮、又言受而不先^(校2)。

如言「聖人執左契而不責於人」⁽¹⁾、契有左右、左所以^(校3)銜 右。言左契、受之義也。「方子」

(校1)「玄」、楠本本、和刻本、正中書局本は「元」に作る。(校2)「又言受而不先」、朝鮮整版、正中書局本は細注とする。(校3)「銜」、朝鮮整版、和刻本、正中書局本は「銜」に作る。

※ 楠本本は【33】條の直後に配されている。

〔訳〕

「玄牝」とは、思うに、万物の感応が無限であることを言い、又、(物からの働きかけを)受けるのであって、先に働きかけるのではないことを言っている。「聖人

は割符の左半分を握つて、人に取り立てることはしないのだ」等は、割符には左右が有つて、左が右を噛むのだ。「左契」と言うのは、受けるという意味である。

(李方子)

〔注〕

(1)「聖人執左契」：「是以聖人執左契、而不責於

人」(『老子』第七十九章)。

(2)「方子」：李方子。第一稿【13】條注(3)を參

照。

【33】

沈^(校1) 莊仲問、「谷神不死、是謂玄牝、如何」。曰^(校2)、

「谷神是那箇^(校3) 虚而應物底物事」。又問、「常有欲以

觀其微^(校4)」、微^(校5)之義如何。曰^(校6)、「微^(校7)是那

邊微^(校8)、如邊界相似、說^(校9) 那^(校10) 應接處。向來人

皆作『常無』『常有』點、不若只作『常有欲』『無欲』點。

義剛問、「原壤^(校11) 看來也是學老子」。曰^(校12)、「他

也不似老子、老子却不恁地」。莊仲曰、「却似莊子^(校13)」。

曰^(校14)、「是。便^(校15) 是夫子時已有這樣人了」。莊仲

曰^(校16)、「莊子雖以老子爲宗、然老子之學^(校17) 尚要

出來應世、莊子却不如此」。曰^(校18)、「莊子說得較開

潤^(校13)、較高遠⁽³⁾、然却較虚、走⁽⁴⁾了老子意

思^(校14)。若在老子當時看來、也不甚喜他如此說」。莊

仲問、「道可道^(校15) 如何解」。曰^(校16)、「道而可道、則非

常道。名而可名、則非常名」。又問「玄」之義。曰^(校17)、「玄、

只是深遠而至於黑窅窅地處^(校18)、那便^(校19) 是衆妙所在」。

又問「寵辱若驚、貴大患若身」。曰^(校20)、「從^(校21) 前理會此章^(校22) 不得」。〔義剛^(校23) 〕

(校1)「沈」、楠本本は「周」に作る。(校2)「曰」、

楠本本は「先生曰」に作る。(校3)「箇」、楠本本は

「个」に作る。(校4)「微」、和刻本は「竅」に作る。

(校5)「微」、楠本本は「竅」に作る。(校6)「說」、

楠本本は「是說」に作る。(校7)「那」、楠本本は

「那个」に作る。(校8)「老子」、楠本本は「那老子」

に作る。(校9)「莊子」、楠本本は「莊子模樣」に

作る。(校10)「便」、朝鮮整版は「便」に作る。

(校11)「曰」、楠本本は「云」に作る。(校12)「學」、

楠本本は「文字却」に作る。「文字」は「孝」の誤り

と思われる。(校13)「潤」、楠本本は「潤」に作り、

朝鮮整版、正中書局本、和刻本は「闊」に作る。(校

14)「意思」、楠本本は「意」に作る。(校15)「從」、

楠本本は「向」に作る。(校16)「此章」、楠本本は「曉

這一章」に作る。

※楠本本は【28】條の直後に配されている。

〔訳〕

沈憫の質問「『谷神は死に絶えることはなく、それを玄牝と呼ぶ』とはどういうことですか」。朱子「『谷神』とは空っぽで物に應じるもののことだ」。又質問「『いつでも欲があれば、その微を見るのだ』の、『微』とはどの様な意味でしょうか」。朱子「『微』は『辺微』のことで、境界線の様なもので、人が事物に対応する場のことを言っているのだ。今まで人々は皆『常無』、『常有』で句点としていたが、『常有欲』、『常無欲』で句点とする方がよい」。義剛の質問「原壤は見たところ老子を学んでいた様ですが」。朱子「彼の説は老子には似ていないだろう。老子はあの様ではない。莊仲「むしろ莊子に似ています」。朱子「そうだ。即ち、孔子の時に既にあの様な人がいたのだ。莊仲「莊子は老子を根本とはしているものの、しかし、老子の学はやはり積極的に世に応じようとしています。莊子はその様ではありません」。朱子「莊子の説は拘りが無く高尚ではあるが、しかし内容に乏しく、老子(本来)の考え方を(違うものに)変えてしまったのだ。もし、

老子の当時から見るならば、莊子があの様に説くのをあるいは好まなかったであろう。莊仲の質問「『道可道』とはどの様に解すのでしょうか。朱子「道であって道とすべきは常道ではない。名であって名とすべきは常名ではない」。また「玄」の意味に就いて尋ねた。

朱子「『玄』は、単に深遠で真つ黒の場所を意味するだけだ。そこは衆妙が存在する所なのだ」。又「寵愛を受けるか屈辱を受けるか、人々はびくびくとしている、(これら)大きな心配事の原因を我が身と同じように大事にしているからだ」に就いて尋ねた。朱子「以前からこの章の内容を理解することが出来ない」。(黄義剛)

〔注〕

(一)「原壤」：『論語』に「原壤夷俟。子曰、幼而不孫弟、長而無述焉、老而不死。是爲賊。以杖叩其脛」(『論語』「憲問」P.1043)と見られ、『禮記』「檀弓」の「孔子之故人曰原壤、其母死、夫子助之沐椁。原壤登木曰、久矣予之不托於音也。歌曰、狸首之斑然、執女手之卷然。夫子爲弗聞也者而過之。從者曰、子未可以已乎。夫子曰、丘聞之、親者毋失其爲親也、故者毋失其爲故也」

（『禮記』「壇弓下」p.512上）とこう記述は、『莊子』「大宗師」に見られる子桑戸の死去に際しての孟子反と子琴張の様子を髣髴させ、朱熹は「原壤、孔子之故人。母死而歌、蓋老氏之流、自放於禮法之外者」（『論語集注』「憲問」p.160）と注を付している。

（2）「開濶」：「広々として伸びやかである、こだわりの無い」の意。『語類』には「開濶中又着細密、寛緩中又着謹嚴」（『語類』卷八p.144）、「曾點開濶、漆雕開深穩」（『語類』卷二十八p.717）等多く見られる。「開濶」は「細密」「深穩」に対する概念で、それ自体に否定的意味は無いものの、それだけに偏ることに注意が払われている。尚、『近代漢語大詞典』は「暢豁、開朗」とする(p.1020)。

（3）「高遠」：「高尚である」の意。『語類』には「聖人之道有高遠處、有平實處」（『語類』卷八p.129）等多数見られるが、この場合は、「高尚に過ぎる」という否定的意味合いを含むものである。同様の用例として「張洽因先生言近來學者多務高遠、不自近處著工夫。因言、近來學者誠有好奇

高之弊」（『語類』卷一百二十一p.2937）等と見られる。尚、否定的「高」に就いては第二稿【22】條注(3)「好高」を参照。

（4）「走」：「本来の状態を失う、変質させる」の意。『語類』には「前輩云、讀書不可不敬。敬便精專、不走了這心」（『語類』卷十p.168）等と有る。『近代漢語大詞典』は「錯失、変易」（p.2468）とする。『語類』に多く見られる「走作」と類似の使用と見られる。『三浦語類』は「走作」を「範圍を軼出（はみ出る）するを謂う」とし(p.96)、『朱子語類訳注卷十〜十一』は「横道にそれること」（p.135）と解説する。

（5）「黑窄窄地處」：「真つ黒」の意。『語類』には「若上面著布衣、裏面著布襖、便是内外黑窄窄地」（『語類』卷六十四p.1598）等見られる。『朱子語類訳注卷十〜十一』(p.66)を参照。

（6）「寵辱若驚」：「寵辱若驚、貴大患若身。何謂寵辱若驚。寵爲下、得之若驚、失之若驚。是謂寵辱若驚。何謂貴大患若身。吾所以有大患者、爲吾有身、及吾無身、吾有何患」（『老子』第十三章）。

(7) 「義剛」：黄義剛。第一稿【16】條注(2)を参照。

【34】

張以道 問「載營魄」與「抱一能無離乎」之義。

曰(校1)、「魄是一、魂是二。一是水、二是火。二(校2) 抱一、

火守水(校3)。魂載魄、動守靜也」。〔義剛〕

(校1) 「魄與抱一能無離乎之義。曰、楠本本は無し。

(校2) 「二、正中書局本は「一」に作る。

〔訳〕

張以道が「營魄を載せ」と「一を抱いてそこから離れることが無いでいられるか」の意味を質問した。朱子「魄は一で、魂は二だ。一は水で、二は火だ。二は一を抱き、火は水を守る。魂が魄を載せ、動が静を守るのだ」。(黄義剛)

〔注〕

(1) 「張以道」：詳細不明。『文集』卷八十四には、

「跋張以道家藏東坡枯木怪石」(慶元五年己未

(1199年))が収められている。

(2) 「抱一能無離乎」：『老子』第十章。第一稿

【4】條注(4)を参照。

(3) 「一、二」：『易』「繫辭傳上」の「天一地二」

(p.55)及び『尚書』「洪範」の「五行、一曰水、

二曰火、三曰木、四曰金、五曰土」(『十三經注

疏分段標點』本『尚書』「洪範」p.46下。新文

豊出版公司、二〇〇一年)等に基づくが、第十章

注釈に「天一、地二」の觀念を持ち込む発想は、

北宋・徽宗注に「天一生水、於物爲精。地二生

火、於物爲神。精神生於道、形本生於精。守而忽

失、與神爲一、則精與神合而不離」(『宋徽宗

御解道德真經』1/18a/5)と、「一・水・精」と

「二・火・神」の一体化として見られる。『語

類』には「天一自是生水、地二自是生火」(『語

類』卷一p.9)と見られる(『朱子語類訳注卷一

〜11』p.67)。

【35】

「專氣致柔」(校1)、只看他這箇(校1) 甚麼様工夫、專、非

守之謂也(校2)、只是專一無間斷。致柔、是到那柔之極處。

纔有一毫(校2) 發露、便(校3) 是剛、這氣便(校3) 粗了(校3)。〔箇

(校1)「箇」、楠本本は「个」に作る。(校2)「毫」、

正中書局本は「豪」に作る。(校3)「便」、朝鮮整

版は「**儼**」に作る。

〔訳〕

「氣を集中し柔軟にし」に就いて、老子がどの様な工夫しているのかを見るならば、「**專**」とは、守るという意味ではなく、**專一**として中斷することが無いことだ。「**致柔**」とは、柔の極地に至る意味である。もし僅かでも（意識や心の働きが外に）発露することが有るならば、それは「**剛**」となってしまう、その氣は粗いものとなってしまうのだ。（沈憫）

〔注〕

(1) 「**專氣致柔**」：『老子』第十章。第一稿【4】條注(4)を参照。

(2) 「**專、非守之謂也**」：朱熹の批判に相当する第十章に關する先行注としては、河上公注「**專守精氣使不亂、則形體能應之而柔順**」（道教典籍選刊『老子道德經河上公章句』、中華書局、1993年、p.34）、北宋・陸佃「**蓋內守者、氣之所以致專**」（彭耜『道德眞經集註』3/11b/7）、北宋・曹道冲「**能專守一氣、通於無間**」（同3/12a/3）等がある。

(3) 本條とほぼ同文が『語類』に「又曰、**專氣致柔**、

不是守字、却是專字。便只是專在此、全不放出、氣便細。若放些字出、便粗了也」（『語類』卷三 p.41）と見られる。

【36】

「老子之學只要退步柔伏、不與你爭⁽¹⁾。才有一毫⁽²⁾主張計較思慮之心、這氣便⁽³⁾粗⁽⁴⁾了。故曰『**致虛極、守靜篤**』⁽⁵⁾、又曰『**專氣致柔、能如嬰兒**』⁽⁶⁾乎⁽⁷⁾。又曰『**知其雄、守其雌、爲天下谷**』⁽⁸⁾。知其白、守其黑、爲天下谷⁽⁹⁾。所謂⁽¹⁰⁾谷、只是低⁽¹¹⁾下處。讓你在高處、他只要在卑下處、全不與你爭。他這工夫極離⁽¹²⁾。常見畫本老子便⁽¹³⁾是這般氣象、笑嘻嘻地、便⁽¹⁴⁾是箇⁽¹⁵⁾退步占便⁽¹⁶⁾宜⁽¹⁷⁾。底人。雖未必肖他、然亦是它氣象也。只是他放出無狀來、便⁽¹⁸⁾不可當⁽¹⁹⁾。如曰『**以正治國、以奇用兵、以無事取天下**』⁽²⁰⁾、他取天下便⁽²¹⁾是用此道。如子房之術、全是如此。曉關之戰、啗秦將以利、與之連和了、即回⁽²²⁾兵殺之⁽²³⁾。項羽⁽²⁴⁾約和、已講解了、即勸高祖追之。漢家始終治天下全是得此術、至武帝盡發出來⁽²⁵⁾。便⁽²⁶⁾即當子房閑⁽²⁷⁾時不做聲氣⁽²⁸⁾、莫教他說一語、更⁽²⁹⁾不可當⁽³⁰⁾。少年也任俠殺人⁽³¹⁾、後來因黃石公⁽³²⁾教得來⁽³³⁾

較細、只是都使人不疑他、此其所以乖也。莊子比老子便（段2）不同。莊子又轉調（段3）了精神、發出來粗（段3）。列子比莊子又較細膩（段15）。問「御風之說、亦寓言否（段16）」。曰、「然」。「儻」

〔校1〕「毫」、楠本本、正中書局本は「豪」に作る。

〔校2〕「便」、朝鮮整版は「儻」に作る。〔校3〕

「粗」、楠本本、正中書局本、和刻本は「麤」に作り、朝鮮整版は「麤」に作る。〔校4〕「兒」、楠本本は「児」に作る。〔校5〕「雄」、和刻本は「樞」に作る。

〔校6〕「低」、正中書局本は「祇」に作る。〔校7〕「離」、朝鮮整版、楠本本、和刻本、正中書局本は「難」に作る。〔校8〕「箇」、楠本本は「个」に作る。

〔校9〕「宜」、楠本本は「宜」に作る。〔校10〕「回」、朝鮮整版、楠本本、正中書局本は「回」に作る。〔校11〕「項羽」、楠本本は「與項羽」に作る。〔校12〕「閑」、朝鮮整版は「間」に作る。〔校13〕「更」、朝鮮整版は「更」に作る。

〔訳〕

「老子の学は退いて柔軟な態度をとり、人と争わないうようにしようとするものだ。もし僅かでも主張したり、目論んだり、あれこれと考える心が有れば、その気性

は（慎重さが欠け）大雑把となつてしまふ。だから『どこまでも虚を極め、静けさを深く守る』と言ひ、又『氣を集中し柔軟にし、赤子の様になることが出来ようか』と言ひ、又『雄の（剛強さを）知りながら、雌（の柔軟さ）を守るならば、天下の（人々の集まる）谿となるであろう。明らかなさを知りつつ、暗さを守り続けるならば、天下の（人々の集まる）谷となるであろう』と言つているのだ。『谿』とか『谷』とは、低い場所の意味だ。人には高い場所に居させ、自分は低い場所に居て、全く人と争わないことを望むのだ。老子のこの様な方法は極めて風変わりだ。老子の肖像画を見るたびに、この様な雰囲氣が漂つていて、それは、にこにことしていて、一步退いて、自分の都合の好いことのみをするという様な人である。それは必ずしも老子という人物の姿には似てはいないが、しかし、彼の雰囲氣がそこには有る。しかし、老子が『無』の状態から離れて出てくると、もう誰もかなわない。例えば、『正しいやり方で国を治め、奇策によつて戦争を行い、何事もしないで天下を取る』と言つているのは、老子が天下を取るのにこの方法を用いるということだ。張子房の術などは全くこの様なものである。嶢関の戦いで、

秦將を利益で誘い、秦と和解したのに、直ちに兵を帰して秦を殺した。項羽との和約は、一旦和解したのに、直ちに高祖にそれを追撃させた。漢王朝は終始天下を治めるのに全てこの術を用い、武帝に至ってそれが大いに發揮されたのだ。即ち、何事も無い時は張子房はなりを潜め、一語も話さないもので、これはどうしようもない。少年の時は任侠から人を殺そうとしたことが有ったが、後に黄石公の指導によってやや周到となり、人々から疑われない様になったのだ。これが彼の賢い理由なのだ。莊子は老子と比べると異なっていて、莊子も精神を通常とはひっくり返しているのだが、外へ向けて働きかけると大雑把となってしまう。列子は莊子と比べるとやや細々としている。「御風の説は寓言ですか?」。朱子「その通りだ」。(沈憫)

〔注〕

(1) 本條と後出【40】條とに共通する内容が、『語類』に「老子之意正不如此、只是要柔伏退歩耳。

觀他這一章盡說柔底意思。云、載營魄、抱一、能無離乎。專氣致柔、能如嬰兒乎。天門闢闔、能爲雌乎。老子一書意思都是如此。它只要退歩不與你爭。如一箇人叫哮跳躑、我這裏只是不做聲、只管

退歩。少間叫哮跳躑者自然而屈、而我之柔伏應自有餘。老子心最毒、其所以不與人爭者、乃所以深爭之也。其設心措意都是如此。閑時他只是如此柔伏、遇著那剛強底人、它便是如此待你。張子房亦是如此。如云、惟天下之至柔、馳騁天下之至堅。又云、以無爲取天下、這裏便是它無狀處。據此、便是它柔之發用功效處」(『語類』卷一百三十七 p.326)と見られ、又、「老子之術、自有退後一著。事也不攙前去做、說也不會說將出、但任你做得狼狽了、自家徐出以應之」(『語類』卷一百二十 p.2913)とも見られる。尚「不爭」の語は『老子』には「上善若水、水善利萬物而不爭、處衆人之所惡、故幾於道」(『老子』第八章)、「夫唯不爭、故天下莫能與之爭」(同第二十二章)等々多数見られる。

(2) 「主張計較思慮之心」：「主張」、「先入觀に基づいて主張する」の意。『語類』には「今人只憑一己私意、瞥見些子說話、便立箇主張、硬要去說、便要聖賢從我言語路頭去、如何會有益」(『語類』卷八 p.140)等と多数見られる。『近代漢語大詞典』は「主意、打算」(p.2425)とす

- る。「計較」、「計算高くあれこれと考える」の意で、『語類』には「君子喻於義、小人喻於利。君子只知得箇當做與不當做、當做處便是合當如此。小人則只計較利害、如此則利、如此則害」（『語類』卷二十七p.701）等と見られる。『近代漢語大詞典』は「爭多論少、斤斤算計」(p.385)とする。「思慮」、「あれこれと考える」の意で、『語類』には「無魂、則魄不能以自存。今人多思慮役役、魂都與魄相離了」（『語類』卷三p.41）、「若常存得此心、應事接物、雖不中不遠。思慮紛擾於中、都是不能存此心」（『語類』卷六p.114）等と見られ、「思慮」の結果「魂魄」が分離したり「存心」が不可能となるなど、否定的意味合いの例が見られる。尚、『語類』には「人之能思慮計畫者、魂之爲也。能記憶辨別者、魄之爲也」（『語類』卷三p.43）と、「思慮計畫」を「魂」の所為とする記述が見られる。
- (3) 「致虚極」：『老子』第十六章。第一稿【8】
 條注(5)を参照。
- (4) 「專氣致柔」：『老子』第十章。第一稿【4】
 條注(4)を参照。
- (5) 「知其雄」：「知其雄、守其雌、爲天下谿。爲天下谿、常德不離、復歸於嬰兒」（『老子』第二十八章）。
- (6) 「占便宜」：第一稿【3】條注(2)、【5】條注(5)を参照。
- (7) 「不可當」：「抵抗する」の意。本卷には三例見られ、その他「杜詩初年甚精細、晚年橫逆不可當、只意到處便押一箇韻」（『語類』卷一百四十p.326）と見られる。「當」は『近代漢語大詞典』は「抵擋、抗御」(p.393)とする。
- (8) 「以正治國」：『老子』第五十七章。第一稿【8】條注(7)を参照。
- (9) 「曉關之戰」：第一稿【7】條注(7)を参照。
- (10) 「武帝盡發出來」：武帝が神仙・方術をとくに好んだことを指すか。『史記』卷二十八「封禪書第六」、卷十二「孝武本紀第十二」等を参照。
- (11) 「不做聲氣」：『語類』には「郷原」に就いて「郷原却是不做聲、不做氣、陰沈做罪過底人」（『語類』卷四十二p.1092）と見られる。
- (12) 「少年也任俠殺人」：『漢書』が記す、黄石老人

と出会う前の張子房が「秦皇帝東游、至博狼中、良與客狙擊秦皇帝、誤中副車」（『漢書』卷四十一「張陳王周傳第十」p.2023）と、博狼沙に於いて始皇帝を狙撃しようとしたことを指すか。

- (13) 「黄石公」：張子房と黄石老人に就いては『漢書』卷四十一「張陳王周傳第十」（p.2023以下）を参照。又、張子房が黄老思想を学んでいたことに就いては、『語類』に「子房今日說了脱空、明日更無愧色、畢竟只是黄老之學。及後疑戮功臣時、更尋討他不著」（『語類』卷一百三十五p.3221）と有り、「黄石公」との関わりに就いては「子房全是黄老、皆自黄石一編中來。：曰、又有黄石公素書、然大率是這樣説話」（同p.3222）と有る。張子房が人から疑われない様に務めたというのは、例えば、高祖旗揚げの時からの家臣である蕭何が高祖に疑われ続けたのと対照的である。金谷治『秦漢思想史研究』を参照。第一稿【7】條注（7）も参照。
- (14) 「轉調」：第二稿【25】條注（1）を参照。
- (15) 「細賦」：「細やか、緻密」の意。『語類』には「顔子底儘細賦、子路底只是較粗。然都是去

得箇私意了、只是有粗細」（『語類』卷二十九p.154）等と多く見られ、「粗」に対する概念である。『近代漢語大詞典』は「周詳、細致」（p.1989）とする。

- (16) 「御風之説」：「夫列子御風而行、冷然善也。旬有五日而後反。彼於致福者、未數數然也。此雖免乎行、猶有所待者也」（『莊子』「逍遙遊」p.4）。

古之爲善士章第十五

【37】

甘叔懷⁽¹⁾ 説「先生舊常⁽²⁾ 謂老子也見得此箇⁽³⁾ 道理、只是怕與事物交涉、故其言有曰、『豫兮若冬涉川、猶兮若畏四隣、儼若容⁽⁴⁾』⁽³⁾。廣因以質於先生。曰、「老子説話大抵如此、只是欲得退步占⁽⁴⁾、不要與事物接。如『治人事天莫若嗇』⁽⁵⁾、迫之而後動、不得已而後起⁽⁶⁾、皆是這樣意思。故爲其學者多流於術數、如申、韓之徒⁽⁵⁾、皆是也⁽⁷⁾。其後⁽⁶⁾ 兵家亦祖其説、如陰符經之類是也⁽⁸⁾。他説⁽⁷⁾ 『以正治國、以奇用兵、以無事取天下』⁽⁹⁾、據他所謂無事者、乃是大奇⁽¹⁰⁾、耳、故後來如宋齊丘遂欲以無事竊人之國⁽¹¹⁾。如今道家者

流、又却都不理會得他意思。「廣⁽¹²⁾」

(校1)「常」、楠本本は「嘗」に作る。(校2)「箇」、楠本本は「个」に作る。(校3)「容」、和刻本は「客」に作る。(校4)「起」、楠本本は「已」に作る。(校5)「徒」、正中書局本は「徒」に作る。(校6)「其後」、楠本本は「其後則」に作る。(校7)「他説」、楠本本は「正如他説」に作る。

〔訳〕

甘叔懷「先生は以前より、老子も道理を理解していたが、ただ、物事と関わるのを恐れていた、だから、その言葉には『おずおずと冬の川を渡る様に慎重で、ぐずぐずと四方を恐れているかの様に注意深く、きりっとして、立ち居振る舞いがととのっているかの様だ』等が有るのだとおっしゃっていました」。輔広がそこで先生に質問した。朱子は「老子の話は大体この様なもので、ひたすら世間から退いて悪巧みをし、物事と接しようとしななのだ。『人を治め天に仕えるには審み深いのが一番だ』などは、迫られてから後に動き、やむを得なくなつてから立ち上がるもので、まさしく、この様な意味なのだ。だから、それを学ぶ者の多くは縦横家や法家に流れたので、申不害、韓非子の

輩がすべてそうなのだ。その後、兵家も又老子の説を宗旨とし、『陰符經』の類がそうだ。老子は『正しいやり方で国を治め、奇策によって戦争を行い、何事もしないで天下を取る』と説いているが、老子が言う『無事』に依るならば、それは大いなる奇策に他ならない。だから、後に宋斉丘などが『無事』で人の国を盗もうとしたのだ。現在の『道家者流』は、むしろ老子の意図を全く理解していないのである」。(輔広)

〔注〕

(1)「甘叔懷」：詳細不明。『郡齋讀書志』に「碧崖詩集五卷。右閤皂山羽士甘夢叔叔懷之詩也。叔懷嘗登晦菴、誠齋之門。楊長孺爲之序」と有り、閤皂山の「羽士」で、朱熹の下で学んだことが有るとされている。『語類』には朱熹と甘叔懷の問答が記録されており(巻六十五p.1610)、『文集』巻九には「詩送碧崖甘叔懷游廬阜兼簡白鹿山長吳兄唐卿及諸耆舊三首」が有り、『文集』巻八十四「書河圖洛書後」(慶元三年丁巳(1197年))には「閤皂甘君叔懷欲刻二圖山中、賢者未必深考、又當大啓爭端、聊書以諗之」と有り、同巻には「跋周益公楊誠齋送甘叔懷詩文卷後」(慶元五

年）が収められている。

(2) 「舊常」：「もとの形、以前の通常の状態」の意。『語類』には「舊常」の二文字で熟した用例が数例見られる。

(3) 「豫兮若冬涉川」：「豫焉若冬涉川、猶兮若畏四鄰、儼兮若若容、渙兮若冰之將釋、敦兮若若樸、曠兮若若谷、混兮若若濁」（『老子』第十五章）。尚、『語類』には「曳輪濡尾、是只爭些子時候、是欲到與未到之間。不是不欲濟、是要濟而未敢輕濟。如曹操臨敵、意思安閑、如不欲戰。老子所謂猶若冬涉川之象。涉則必竟涉、只是畏那寒了、未敢便涉」（『語類』卷七十一p.1673）と見られる。

(4) 「占姦」：「悪だくみをする」の意。『語類』には「佛氏只是占便宜、討閑靜處去。老莊只是占姦、要他自身平穩」（『語類』卷一百十三p.2742）と、老莊を批判する表現として見られる。

(5) 「治人事天莫若嗇」：「治人事天莫若嗇。夫唯嗇、是謂早服。早服、謂之重積德。重積德則無不克。無不克則莫知其極。莫知其極、可以有國。」

有國之母、可以長久。是謂深根固柢、長生久視之道」（『老子』第五十九章）。本巻【46】

【48】條参照。

(6) 「迫之而後動、不得已而後起」：『莊子』に「故曰、聖人之生也天行、其死也物化。靜而與陰同德、動而與陽同波。不爲福先、不爲禍始。感而後應、迫而後動、不得已而後起」（『莊子』「刻意」p.133）と見られる。

(7) 「申韓之徒」：「申子之學本於黃老而主刑名。著書二篇、號曰申子。韓非者、韓之諸公子也。喜刑名法術之學、而其歸本於黃老」（『史記』「老子韓非列傳第二」p.2146）。尚、【40】條を参照。

(8) 「陰符經」：『陰符經』に就いては、本巻【62】條を参照。尚、黃老の学・刑名と『陰符經』とを関連付ける姿勢は、張南軒にも「今諱布一二黃老之學流入於刑名。蓋其翕張取與之意、竊弄造化之機。故其流爲刑名。若陰符經之說、已可見刻薄之意露矣」と見られる（『南軒集』卷十九「答吳晦叔」）。

(9) 「以正治國」：『老子』第五十七章。第一稿

【8】 條注(7)を参照。

(10) 「大奇」：「大いなる奇策」の意。『語類』には、「舊見某人作馬政策云、觀戰、奇也。觀戰勝、又奇也。觀騎戰勝、又大奇也。這雖是粗、中間却有好意思」(『語類』卷一百二十九 p.331)と見られる。

(11) 「宋齊丘」：『老子』第五十七章を踏まえた朱熹の「以無事竊人之國」という発言が具体的に宋齊丘のどの行為を指しているのかは不明ではあるが、例えば、陸游『南唐書』に依れば、南唐の烈祖が宋齊丘の文才を気に入り、「烈祖爲築小亭池中、以橋度、至則徹之、獨與齊丘議事、率至夜分」(『南唐書』「列傳」第一卷)と、二人のみで談義をするまでに至り、更には「然齊丘資躁彊、或議不合、則拂衣逕起、烈祖謝之而已」(同)と完全に主導権を宋齊丘に握られていたことが窺える。又、釋文瑩『湘山野錄』巻下が記録する、上元県の民が暴死し冥府で先主・烈祖に会ったところ、「吾爲宋齊丘所誤、殺和州降者千人、以冤訴囚此」(『全宋筆記 第一編 六』)所収。大象出版社、2003年。P.51)と、宋齊丘のた

めに拷問に遭っていたという話は、こうした両者の関係に基づくものである。又、『資治通鑑綱目』九五八年十一月の「唐放其太傅宋齊丘于九华山」の趙師淵の注には「初、齊丘多樹朋黨、躁進之士爭附之。樞密使陳覺、副使李徵古恃其勢、尤驕慢。…鍾謨素以德明之死怨齊丘、言於唐主曰、齊丘乘國之危、遽謀篡竊、陳覺、徵古爲之羽翼、理不可容」と有る。一方、『語類』には「張子房亦是如此。如云、推天下之至柔、馳騁天下之至堅、又云、以無爲取天下、這裏便是它無狀處」(『語類』卷一百三十七 p.336)と、「無爲」によって「天下」を取ったのは張子房であるという記述も見られる。ちなみに、宋齊丘と道教の関りに就いては、内丹書『化書』の作者は宋齊丘と当初されていたが(張耒「書宋齊丘化書」)、『張右士文集』卷四十七)、南宋以降は、本来は譚峭の著述であったものを宋齊丘が盗用したと言われる様になる(南宋・志磐『佛祖統紀』、大正藏卅冊、p.392c、p.460a等)。尚、『四庫全書』等には宋齊丘の撰とされている『玉管照神局』が収められている。

(12)「廣」：輔廣。第一稿【1】條注(5)参照。

將欲喻之章第三十六

【38】

問老氏柔能勝剛、弱能勝強之說。⁽¹⁾曰、「它便」^(校1) 揀便^(校1) 宜^(校2) 底先占了。若這下、則剛柔寬猛⁽²⁾ 各有用時。⁽³⁾「德明」⁽³⁾」

(校1)「便」、朝鮮整版は「優」に作る。(校2)「宜」、楠本本、正中書局本は「宜」に作る。

【訳】

老子の「柔らかいことが硬いことに勝ち、弱いことが強いことに勝つ」に関する質問。朱子「これは、自分の都合のよい点だけを選んで、先に独り占めするというものだ。この様であれば、剛・柔・寛・猛のどれでもそれぞれに用いる時があるのだ」。(徳明)

(1)「柔能勝剛、弱能勝強」：『老子』には「柔弱勝剛強」(『老子』第三十六章)、「弱之勝強、

柔之勝剛、天下莫不知、莫能行」(『老子』第七十八章)と見られる。

(2)「剛柔寬猛」：「剛柔相推、變在其中矣。繫辭

焉而命之、動在其中矣」(『周易』「繫辭下」p.556)、「永元十五年、從駕南巡、還爲洛陽令。以平正居身、得寬猛之宜」(『後漢書』卷七十六「王渙傳」p.2498)。

(3)「德明」：廖德明、字は子晦、南劍州順昌県の人。『師事』(p.17)、『學案』卷六十九(p.2260)。

上德不德章第三十八

【39】

郭德元⁽¹⁾問、「老子云『夫禮、忠信之薄、而亂之首』⁽²⁾、孔子又却問禮於他⁽³⁾、不知何故」。曰、「他曉得禮之曲折⁽⁴⁾、只是他說這是箇^(校1)無緊要底物事、不將爲事。某初間疑有兩箇^(校1)老聃^(校2)、⁽⁵⁾橫渠亦意其如此⁽⁶⁾。今看來^(校3)不是如此。他曾爲柱下史、故禮自是理會得、所以與孔子說得如此好。只是他又說這箇^(校1)物事不用得亦可、一似聖人用禮時反若多事、所以如此說。禮運中『謀用是作、而兵由此起』⁽⁷⁾等語、便^(校4)自有這箇^(校1)意思」。「文蔚」⁽⁸⁾」

(校1)「箇」、楠本本は「个」に作る。(校2)「聃」、朝鮮整版、楠本本、和刻本、正中書局本は「聃」に作る。

(校3)「看來」、楠本本は「看得來」に作る。(校4)「便」、朝鮮整版は「便」に作る。

〔訳〕

郭徳元の質問「老子は『そもそも礼儀というものは忠信が薄くなつて出来たもので、それは争乱の始まりなのだ』と言っていますか、それなのに孔子が礼に就いて老子に質問したのは何故でしょうか」。朱子「老子は礼の細かい点をよく理解していたが、ただ、彼はそれを大して重要ではない物と言ひ、実行しなかつたのだ。私は最初二人の老聃がいたのではと疑ひ、張横渠も又たその様に考えていた。今はそうではないと思う。老子はかつて周国の書庫の記録官であつたので、礼に就いては自ずと理解していたのだ。だから、孔子とこの様に素晴らしい話が出来たのだ。ただ、彼は同時に礼というものは用いなくても構わないと言ひ、聖人が礼を用いる時はむしろ事柄が煩瑣になるようだと考えていた様で、だからこの様に述べたのだ。『禮記』「禮運」中に『そこで、計謀が用いられ、戦争がこれによつて生じるのである』等の語が有るが、即ち、これがこの意味なのだ。(陳文蔚)

〔注〕

(1) 「郭徳元」：郭友仁、字は徳元、山陽の人。『師事』(p.90)、『補遺』(69.190a)。

(2) 「夫禮、忠信之薄而亂之首」：「故失道而後徳、失徳而後仁、失仁而後義、失義而後禮。夫禮者、忠信之薄而亂之首。前識者、道之華而愚之始」(『老子』第三十八章)。

(3) 「孔子又却問禮於他」：『史記』に「老子者、楚苦縣厲鄉曲仁里人也、姓李氏、名耳、字聃、周守藏室之史也。孔子適周、將問禮於老子。老子曰、子所言者、其人與骨皆已朽矣、獨其言在耳」(『史記』卷六十三「老子韓非列傳第三」p.2139)と見られる。

(4) 「曲折」：「詳しい事柄」の意。礼に関わるものとしては、『語類』に「且如禮儀三百、威儀三千、是許多事、要理會做甚麼。如曾子問一篇問禮之曲折如此、便是理會得川流處、方見得敦化處耳」(『語類』卷二十七p.678)等と見られる。

(5) 「兩箇老聃」：『語類』には「又曰、孔子問老聃之禮、而老聃所言殊無謂。恐老聃與老子非一人、但不可考耳」(『語類』卷一百二十六p.3009)と有る。

- (6) 「横渠」：「孔子適周、誠有訪樂於萇弘、問禮於老聃。老聃未必是今老子、觀老子薄禮、恐非其人、然不害爲兩老子、猶左丘明別有作傳者也」
（『張載集』中華書局、1985年。P.276）。
- (7) 「謀用是作」：「故謀用是作、而兵由此起。禹、湯、文、武、成王、周公、由此其選也」
（『禮記』「禮運」p.1029下）。
- (8) 「文蔚」：陳文蔚。字は才卿、信州鉛山県の人。『師事』（p.95）、『學案』卷六十九（p.2320）。